

『就実論叢』第四六号 抜刷  
就実大学・就実短期大学 二〇一七年二月二八日 発行

〈資料紹介〉

# 倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」

与謝野晶子自筆原稿「子供の事」 図版・翻刻・解題

加藤美奈子

## 〈資料紹介〉倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」

### 与謝野晶子自筆原稿「子供の事」図版・翻刻・解題

加 藤 美 奈 子（生活実践科学科）

はじめに——倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」所収

与謝野晶子自筆資料（歌稿・書簡・原稿）について

倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」（以下、「泣菫文庫」）所蔵の与謝野晶子自筆歌稿計一六枚について、本論叢第四〇～四五号掲載の拙稿において紹介した（『就実論叢』二〇一一～二〇一六年）。また、「泣菫文庫」所収の泣菫宛晶子書簡一五通については、倉敷市編著『倉敷市蔵 薄田泣菫書簡集 詩歌人篇』（八木書店、二〇一五年三月）に、翻刻・注・解説を載せた。

本稿では、「子供の事」と題され、「與謝野晶子」署名（以下、本文では「与謝野晶子」を用いる）のある自筆原稿二枚を紹介する。

二 与謝野晶子自筆原稿「子供の事」図版・翻刻

「泣菫文庫」所収の与謝野晶子自筆原稿「子供の事」二枚の図版（図版1・図版2）を以下に掲げ、翻刻を後に示した。図版は文字の見やすさを考慮し、画像の明るさ・コントラストに若干の調整を加えている。翻刻における改行等は図版に準じている。字体は新旧ともに自筆に準じた。■は本文で文字を訂正している箇所を示し、その他注記も「」内に示した。

なお図版は、本学吉備地方文化研究所による撮影で、倉敷市の許諾を得て掲載した。担当の文化振興課・薄田泣菫顕彰会に御礼申し上げます。

十八廿 ね 五 集



[illegible]

【図版1】与謝野晶子自筆原稿「子供の事 一」

〔欄外左上〕 一

子供の事

与謝野晶子

貧しい日暮しの中なかに生れて参りました私共の子供は先づ第一に育つか育たぬかが覺えないやうに思ひます。幸ひに今日まで奇蹟のやうにして育つて参つたのですから、此後も両親さへ生きて居て殆ど彼等の犠牲のやうになつて働いて遣ることが出来るなら、どうにか肉か体だだけは育つて行くだらうと考へますが、肉体は曲りなりに育つにしましても、多勢の子供ですから、一人一人に學校教育を授けて遣れるかと云ふことになると、全く空を掴むやうで自信がありません。眞面目に考へますと皆みんなに中學校■さへも卒業させることが■不可能に想はれます。

さうすると、私共の子供は到底世間並の教育を受け得ないと云ふ運命を負うて居ります。運命はあながち過去に限られたものでなく、前途の運命は其人の力で新しく切り開かれるものだと思ひますけれど、其新しい力を養ふ

【図版2】与謝野晶子自筆原稿「子供の事 二」

〔欄外左上〕 二

だけの教育を適當な時期に受け得ない私共の子供は、何時までも過去の運命に計り支配せられて沈淪せねばならないだらうと思ひます。つまり世間並の教育の缺けた者は世間並の人間になつて競争することが出来ない結果にならうと思ひます。

其れで物質上にも精神上にも一人前になれ相にない私共の子供に就いて、御質問のやうな將來の結婚問題などは私共の夢にも考へ及ばないことで御座います。

私共の實際の境遇から考へまして、まだやつと小學校へ入れた計りの子供等のために、非常に懸け離れた配遇ていぐ者の選擇などを空想することの出来ないのは致方が御座いけません。併し強ひてさう云ふ將來の問題などを今の境遇から考へますなら、私共の子供は何れも淋しく清い獨身で暮す外無からうと想像されま

す。(座談の一節)

### 三 与謝野晶子自筆原稿「子供の事」解題

用紙は二枚とも、縦25.4cm×横35.7cmの洋紙、「B4」サイズに相当する青野二〇字×二〇行の原稿用紙で、左下欄外に「十ノ廿 松屋製」と青で印刷されている。

「泣菫文庫」所収の晶子自筆歌稿においては、大正二年（本論叢第四一号掲載歌稿「湯あかりの後」）～大正五年七月（本論叢第四二・四四・四五号掲載歌稿「萱の葉」・歌稿「輓歌 上田先生のため」・歌稿「霸王樹」）の五枚が「松屋製」、大正六年五月（本論叢第四二号掲載歌稿【図版3・4】）～大正一〇年十一月（本論叢第四二号掲載歌稿【図版3・4】）の二一枚が「神樂阪山田製」である。

『定本與謝野晶子全集』（講談社）、「鉄幹晶子全集」（勉誠出版）は、晶子による「評論感想集」、詩歌・小説以外の著書を所収するが、「子供の事」という表題の文章は、収められていない。『與謝野晶子評論著作集』（龍溪書舎）は、晶子の評論を中心とした著書の初版（影印による）の他、雑誌・新聞に掲載された晶子の文章を収め、「著作年表」が編まれているが（同書第二二巻、二〇〇三年）、それらにもこの表題は見出し得ない。現時点では、『全集』等に未収録ということとは言えそうであるが、初出紙・誌が確認されず、執筆時期の正確な特定は困難である。が、上述の「泣菫文庫」所収の歌稿において「松屋製」を使用したのと同時に、他の歌稿同様、「大阪毎日新聞」掲載のため、泣菫に宛てて送られた自筆原稿ではないか

と推測される。

「子供の事」の本文、内容からも執筆時期について検討したい。

「大正元年（一九一二年）八月一日、泣菫薄田淳介は「編輯局見習学芸部勤務」といふ辞令を受けて、大阪毎日新聞社（現在の毎日新聞大阪本社）に入社した」（松村緑『薄田泣菫考』（教育出版センター、昭和五二年）一二五頁、旧字体は新字体に改めた）。与謝野寛・晶子の長男の光が生まれたのが一九〇二（明治三五）年、大正元年には数え年一一歳である。当時の就学年齢は六歳であるから、「子供の事」本文における、「まだやつと小學校へ入れた計りの子供等」という表現とは、誇張があるのかもしれないが、大正元年の時点では、やや矛盾する印象を持つ。また、この長男は、三年後の大正四（一九一五）年に、中学校に入学している。本文の「皆に中學校さへも卒業させることが不可能に想はれます」という記述からも、大正元年以前にこの原稿が書かれた可能性も考えられそうである。

「子供の事」に、「多勢の子供」とあるが、長男の光（上田敏の命名）の誕生の後、一九〇四（明治三七）年に次男・秀（泣菫の命名）、一九〇七（明治四〇）年に長女・次女で双子の八峰・七瀬（森鷗外の命名）、一九〇九（明治四二）年に三男・麟、一九一〇（明治四三）年に三女・佐保子、一九一一（明治四四）年に四女・宇智子、欧州への外遊後、一九一三（大正二）年に四男・アウギュスト（滞仏中訪問したロダンの命名）、一九一五（大正四）年に五女・エレンヌ、一九一六（大正五）年に五男・健が生まれ、一九一九（大正

八) 年生まれの藤子まで、五男六女を得ている。明治末から大正期にかけて、どの時点であっても「多勢の子供」があり、年代の特定には繋がらない。

一九一(明治四四)年四月の「女學世界」を初出とする「私の宅の子供」(『一隅より』(金尾文淵堂、明治四四年)所収、引用は『定本與謝野晶子全集』第十四卷(講談社)旧字体は新字体に改め、ルビは省略した。以下、引用においては同断)には、次のようにある。

身体を健かに育てて中学程度の教育まで親が面倒を見てやれば、其れから先は自分で好きな方向に進むであらう。其時に猶親としての義務は学資を用意して置いて遣る事だと思つてゐるのです。(一三七頁)

同文にはまた、「十歳になる長男の光」(一三一頁)が、「画も好きですから毎日曜に藤島先生のお宅で遊半分に教へて頂きます」(一三六頁)とある。「藤島先生」は、雑誌「明星」の初期において表紙・挿画を描き、『みだれ髪』の装幀も手掛けた洋画家・藤島武二(一八六七―一九四三)であらう。「私の宅の子供」は、「物質的には随分と困りも致しますが、精神上には私共も子供も比較的多くの自由を得て居ります」(一三七頁)と結ばれている。「子供の事」では「貧しい日暮し」と書き出され、「私の宅の子供」でも「貧しい中」(一三三頁)とあり、「物質的」な貧しさを伝える内容は共通するが、後者は「精神上」の教育の豊かさを肯定的に述べている点が大きく異なる。

遡って、一九〇九(明治四二)年四月四日「東京毎日新聞」掲載の「詩人の妻となつて五人の子を抱えし私の生活」においても、「一定の収入も御座いませんし(中略)誠に見すばらしい惨めな生活を致して居ります」(『與謝野晶子評論著作集』第十六卷(龍溪書舎、二〇〇二)一八七頁)と生活苦を嘆きながらも、子供については以下のように述べてる。

品格のあると云ふ事が人間では一番な事として小供を教へて居ります。兄の方は来月から暁星小学へ入ります、弟は六つで、下が二人これは双生児で御座います。(一八九頁)

貧しさの中でも、「品格」という精神性を大切にした教育を子供に施していることにここでもふれている。

「子供の事」においては、「私共の子供は到底世間並の教育を受け得ないと云ふ運命を負うて居ります」「教育を適當な時期に受け得ない私共の子供は、何時までも過去の運命に計り支配せられて沈淪せねばならないだらうと思ひます」と、悲觀的である。

「私の宅の子供」において、「つい申す事が我子の自慢に為つて仕舞ひました」(一三七頁)と自ら言うように、晶子が子供のことを著す場合、子供が精神的に豊かに育ちつつあることを「自慢」するかのような筆致で述べる傾向にある。一九一四(大正三)年「婦人世界」初出の「子供を持たぬ人の知らぬ楽しみ」もその例である。ここでも晶子は、「八人の子の親となりまして、絶えず子供のことばかり心を奪はれてをります。(中略)私の長男は家にゐて、絵



などを書いてをります。絵は好きとみえまして、子供としては上手に書きます」(『與謝野晶子評論著作集』第十七卷(龍溪書舎、二〇〇二)二三六頁)と、長男が「女の子のやうに優しく」(同頁)絵の好きであることをここでも披露している。

「子供の事」では、「物質上にも精神上にも一人前になれ相にない私共の子供」とある。末尾に「座談の一節」とあることから、過剰に卑下した表現となったとも考えられるが、「私の宅の子供」とは隔絶した印象を与える内容・筆致であり、生活苦に言及する部分等は共通するものの、子供の教育について肯定的に述べている前掲の文章と同時期の執筆とは判断し難い印象を受け、内容からの執筆年代の特定には、なお慎重を要する。

「子供の事」に、「御質問のやうな」とあり、「まだやつと小學校へ入れた計りの子供等のために、非常に懸け離れた配遇者アウターの選擇などを空想することの出来ないのは致方が御座いません」とあることから、子供の「配偶者の選択」について、親としてどのような期待があるか、といったことを問われた「座談の一節」であったことが類推される。複数の文学者・著名人に、「アンケート」として回答を求める記事は、当時から新聞・雑誌に散見される企画である。例えば、一九一三(大正二)年七月「中央公論」の、「予は予の娘に如何なる女たらんことを希望するか」という「アンケート」に対して、晶子は「わたしの女の子に対して」と題した回答を寄せている。ここでは、「四人の男の子と四人の女の子とある中で、現に二人の

男の子と二人の女の子とが小学へ通つてゐるのですが(中略)小学を卒へて呉れたら屹度世間並に一方を中学へ、一方を高等女學校へ入れるでせう」(『與謝野晶子評論著作集』第十七卷(前掲)二〇四頁)としている。先にも引用した「子供の事」の「皆みんなに中學校さへも卒業させることが不可能に想はれます」とは、大きく異なっている。

晶子は、本文の「御質問」に対しては、「私共の子供は何れも淋しく清い獨身で暮す外無からうと想像されます」と回答している。「獨身で暮す」ことを「淋し」だけでなく、「清い」と形容していることには、晶子の結婚観の一端が反映されている。

晶子の「私の貞操観」に次のようにある(『雜記帳』(金尾文淵堂、大正四年)所収、『定本與謝野晶子全集』第十四卷(講談社)ルビは省略した)。

自分は十二歳から歴史と文学書とが好きで、家の人に隠して読み耽つたが、天照大御神の如き処女天皇の清らかな氣高い御一生が羨しかつた。伊勢の齋宮加茂の齋院の御上などもなつかしかつた。自分の当時の心持を今から思ふと、穢い現實に面して居ながら飛び離れて美的に理想的に自分の前途を考へ、一生を天使の様な無垢な処女で送りたいと思つて居たのであつた。

(中略)

又十七八歳から後は露西亞のトルストイの翻訳物などを読んで、結婚は罪惡である、人種を絶やして無に帰するのが人間の



理想だと云ふ様な迷信が可なり久しい間自分を囚へて居たので、自分は固より、偶々逢ふ同じ街の友人にも非結婚主義を熱心に勧めたりなんかした。(中略)

親戚の者から縁談を勧める事もあつたが、自分が汚らわしいと云ふ風に眉を顰めるので、自分の前でそんな話を持出す人も後には全く無くなつた。(三七四、三七七頁)

古典文学やトルストイの影響から、「純潔」を尊び、結婚をも否定するほど「清らかな」生涯を憧憬する若き日の晶子が回想されており、「独身」として生涯を送ることを「清い」とした表現に通底するものを感じられる。

#### 四 おわりに——倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」所収 与謝野晶子 自筆資料唯一の散文作品

「泣菫文庫」所蔵の自筆資料は、泣菫に宛てられ、まとまった形で残された「資料群」として、重要な価値のあることは疑い得ない。加えて、旧稿で紹介した晶子自筆歌稿のように、初出として「大阪毎日新聞」掲載が確認されるなどの経緯が明らかな資料が多い。一部、未掲載の詠草も、同じ原稿にある他の詠草の掲載・歌集所収状況から執筆時期がほぼ確定出来る。一方で、与謝野寛の一部資料のように、泣菫のもとに残された経緯の確認が困難で、今後の調査・教示を俟たねば特定し難い例もある(拙稿「倉敷市蔵「薄田泣菫文庫」与謝野寛自筆詩歌他 図版・翻刻・解題」(「近代文学資料研究」

第一号(近代文学資料研究会、平成二七年三月)。この晶子自筆原稿「子供の事」は、「泣菫文庫」の他の晶子自筆資料から、概ね明治末から大正初期と類推されるが、執筆年代・初出の有無については、内容からの検討も難しく、現時点では詳らかにし得ない。

が、晶子の自身の子供に対する従来にはない所見が示されている点でも興味深く、「泣菫文庫」所収である点と併せて、唯一の散文作品であることも注目すべき資料であると言えるだろう。